

期 間 2024年6月23日(日)~29日(土)

視察地 ドイツ ハンブルク

参加者 18名

子どもたちの心とからだの成長は、五感を通じて自然とふれあい、自然の美しさや不思議さを他者と共有することで促されます。このことから、幼児施設での日常的な自然体験は、保育・幼児教育における大切な要素と言えます。『自然ゆたかな園庭がある園』は、乳幼児期の子どもたちが、日々、安心して自然とふれあい、豊かな感性や思いやり、協調性、想像力などを育む場所として最適な環境です。

本ツアーでは、ハンブルクの複数の保育所・幼稚園や、環境センターなどを見学し、ドイツにおける乳幼児期の自然とのふれあいの取り組み動向について学びました。これはその実施レポートです。

視察企画・協力 ಿ 日本生態系協会

# <u>目次</u>

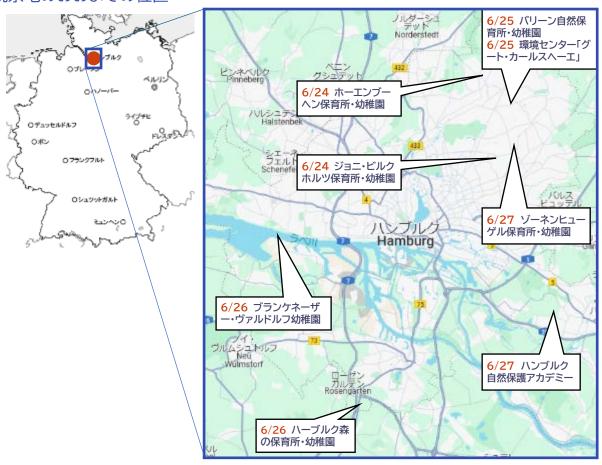
視察関連情報 ······ 2
視察日程
視察地のおおよその位置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
ドイツ・ハンブルクにおける保育・幼児教育など ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
子どもを守るための制度 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
共生社会に向けた保育・幼児教育 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
持続可能な開発のための教育(ESD)とハンブルクでの取り組み ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ハンブルクの保育・幼児教育の手引き ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ドイツ労働福祉団体(AWO) ····································
視察概要 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
1. ホーエンブーヘン保育所・幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
2. ジョニ・ビルクホルツ保育所・幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
3. バリーン自然保育所・幼稚園ブラムフェルト ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
4. グート・カールスヘー工環境センター ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
5. AWO ハーブルク森の保育所・幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・ 15
6. ブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
7. ゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
8. ハンブルク自然保護アカデミー「ボーベルガー・デューハウス」 ・・・・・・・・・・・・・・・ 2

## 視察関連情報

### 視察日程

視察月日	時刻	スケジュール
6/24(月)	09:00-11:00 13:00-14:50	<ul><li>1 ホーエンブーヘン保育所・幼稚園を見学</li><li>2 ジョニ・ビルクホルツ保育所・幼稚園を見学</li></ul>
6/25(火)	08:30-10:30 10:45-12:45	<ul><li>3 バリーン自然保育所・幼稚園ブラムフェルトを見学</li><li>4 環境センター「グート・カールスヘーエ」にて研修</li></ul>
6/26(水)	08:15-10:00 10:45-12:30 午後	<ul><li>5 ハーブルク森の保育所・幼稚園を見学</li><li>6 ブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園を見学</li><li>ハンブルク市内を見学</li></ul>
6/27(木)	08:30-10:15 11:00-13:00	7 ゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園を見学8 ハンブルク自然保護アカデミー「ボーベルガー・デューンハウス」にて研修

#### 視察地のおおよその位置



## ドイツ・ハンブルクにおける保育・幼児教育など

#### 子どもを守るための制度

ドイツでは、1歳になった子どもは何らかの施設で保育を受けることが法的に保障されてます。通常は、1歳を過ぎてから、早い子では8カ月くらいから保育所に入園します。どうしても預かってくれる保育所が見つからない場合、保護者は自治体などに対して訴訟を起こすことも可能です。このことにより、ハンブルクにおける乳幼児の保育施設への入所率は現在98%となっているそうです。

また、ハンブルク市では、1~6歳までの園児に対して1日5時間分の保育料として、一人当たり月額約600ユーロが補助されています。この補助金は、市から園の運営団体にまとめて支払われます。園ではこうした補助金の一部を園庭ビオトープづくりに当てることもできるそうです。

他方、SNSなどの利用が拡大するなか、子どもの肖像権の侵害増加などの問題が深刻化しています。 こうした事態から子どもを守るため、ドイツでは、個人的な子どもの写真を保護者の許可無く撮影し、ソーシャルメディアなどに掲載することが禁止されています。園内でのグループ写真を撮影する際にも、保護者一人一人の承認・署名が必要になることもあるようです。

#### 共生社会に向けた保育・幼児教育

自然ゆたかな園づくりだけでなく、共生社会の形成に向けた取り組みも進んでいます。「インクルーシブ(またはインテグレーション)保育・教育」は、障害の有無や年齢・性別・人種・言語・文化・宗教的背景の違いにかかわらず、一緒に遊ばせながら、子ども一人一人の保育や教育的ニーズにあった支援を行うというものです。3~6歳の異なる年齢だけでなく、園によっては1、2歳の乳幼児も年長の子どもと一緒のグループで遊ばせています。また、園の運営や園庭管理、行事の企画実施などを保護者と連携して行うための取り組みも進んでいます。インクルーシブ保育・教育は、子どもたちの他者への理解を深め、思いやりの心や助け合いの精神を養うのに役立ち、保護者との連携は信頼や協力を得るのに役立っています。

#### 連邦政府の園庭の生物多様性を高めるプロジェクト

日本と同様、生物多様性条約に批准しているドイツでは、その約束を果たすために「生物多様性国家戦略」を策定し、それに基づいて、都市や農地における生物多様性の保全回復プロジェクトなど、多岐にわたる取り組みを実行しています。地域在来の植物を園庭で育てるなど、身近な生きものたちとの日常的なふれあいを促す園づくりが盛んで、政府も様々な取り組みを通じてそれを奨励しています。連邦環境・自然保護・原子炉安全省が全国規模で進めてきたプロジェクト「保育所・幼稚園の子どものための庭 ~一緒に多様性を発見しよう~(ドイツ語 Kinder-Garten im Kindergarten - Gemeinsam Vielfalt entdecken)」は、絶滅の危機にある多様な野生生物に対する保護の意識を幼少期から育てることをねらいとしており、国内多くの園がこれに参加しています。また、自然を観察したり、調べたりすることを通して、子どもの探究心の発達や自然についての理解や知識の向上などを促すプロジェクト「小さな研究者

(Kline Forscher)」に取り組む園も多くあります。

生物多様性豊かな園庭などについての情報交換や交流のための全国ネットワークが設置され、約200 の園が参加しています。プロジェクト参加園に参考情報を提供する目的で、現在までに3種類の冊子が発行されています。2015年7月に、第1弾の「保育所・幼稚園の子どものための庭 一緒に多様性を発見しよう! 一 自然ゆたかな園庭は生物多様性を高める」が発行され、翌16年4月には、同「 一 生物多様性豊かな遊び体験」が、10月には、同「 一 たねから育ててお皿の上まで」が発行されました。



#### 持続可能な開発のための教育(ESD)とハンブルクでの取り組み

2002年、国連ヨハネスブルグ・サミットにおいて、日本政府とNGOの共同提案により、「国連持続可能な開発のための教育(ESD)の10年」が採択されました。これを受け、「国連ESDの10年国際実施計画」(2005年~2014年※日本では英語の略称であるESDと呼ばれていますが、ドイツ語では Bildung für nachhaltige Entwicklung で略称は BNE)が2005年に策定され、ユネスコを中心に世界各国にその推進が呼びかけられました。計画期間後の2014年以降も、引き続き、持続可能な開発のための教育の更なる推進強化が求められるなか、ドイツでは、人格形成上最も重要な幼児期に、協調性や豊かな感

性、健康なからだ、新しい時代にふさわしい考え方や行動などを育むため、「野生の生きもの」、「水」、「土」、「太陽の光」を重要視して、園庭や園舎を見直す動きが加速しています。

ハンブルクは、「ユネスコ学習都市に関するグローバルネットワーク (UNESCO GNLC)」の一員です。これは、ユネスコが立ち上げた国際的 なプラットフォームで、世界中の都市が「持続的な学習都市」に変革することを通じて、都市が抱える様々な課題を解決することを目指しています。 現在、50か国170の都市が参加しています。ハンブルクは、この参加都市として、健全な環境やより暮らしやすい都市づくりを促進するために、学習の機会の拡大に取り組み、SDGs の目標達成に向けた貢献もしてい



ます。

このESDに基づいた幼児教育は、ドイツでは計画が終了した現在も継続的に推進されています。ハンブルクでは 2020 年 1 月に、「2030 年に向けた ESD プログラム」が新たに開始されました。そのプログラムを実行するためのマスタープラン「2030 年に向けた持続可能な開発のための教育 ハンブルクマスタープラン(Hamburger Masterplan Bildung für nachhaltige Entwicklung 2030)」が、2021 年 9 月に策定されました。

#### ハンブルクの保育・幼児教育の手引き

ハンブルクの保育・幼児教育の手引きの正式名称は「Hamburger Bildungsempfehlungen für die Bildung und Erziehung von Kindern in Tageseinrichtungen」で、日本語では「幼児施設



における子どもの育成と教育のためのハンブルグ保育・幼児教育の手引」 といった意味です。

この手引きは2005年に作成(2012年再版)されたもので、ハンブルクにある保育所や幼稚園などの施設は、手引きに沿って園づくりを行うこととなっています。教育分野として、「身体、運動、健康」、「社会・文化的環境」、「コミュニケーション:言語・読み書き・メディア」、「絵画・工作など芸術的教育」、「音楽」、「算数」、「自然・環境・科学技術」の7項目が掲げられています。自然・環境・科学技術の項目では、子どもは五感を使って直接的な体験をすることで、自然について知り、自然の事象を理解することが可能として、直接的な自然体験を促しています。

#### ドイツ労働福祉団体(AWO)

ドイツ労働福祉団体(AWO: Arbeiterwohlfahrt)は、医療・福祉分野で社会に貢献するドイツの公益 団体のひとつです。社会、健康、家族、雇用関連の福祉サービスを提供する全国組織として、1919年に創設されました。ボンにある本部を中心に、国内全域に広がる支社ネットワークを有しています。民間福祉団体として、この国の福祉サービスを長期にわたり担ってきたAWOは、「人間は、民族、国籍にかかわらず、全て平等」ということを理念に掲げ、難民の救済などにも力を入れてきました。ほか、保育所や幼稚園、青少年や高齢者、障害者向けの施設の運営や管理など、多岐にわたる社会福祉事業を展開しており、福祉の分野では、なくてはならない存在となっています。

AWOの支部はハンブルクにもあり、市内の20か所以上の保育所・幼稚園を運営しています。本ツアーの訪問先のうち、ホーエンブーヘン、ジョニ・ビルクホルツ、ゾーネンヒューゲル、ハーブルク森の保育所・幼稚園の4か所がAWOハンブルク支部の所属園です。AWOハンブルク支部は、子どもの権利の強化向上を図るために、2015年に「子どもの権利 12 か条」に関する冊子を発行しました。これは、保育教育施設における子どもと大人の協力に関する基本理念をまとめたもので、子どもたち、保護者の協力を得て、

1年ほどかけて完成しました。大人向けと子ども向けの2通りあり、子ども向けでは、大人向けの表現(例えば、1.自己決定の権利、5.教育を受ける権利、8. (意見等の)表現の自由の権利、10.余暇と休養の権利、12.法的情報を得る権利等)が、子どもにも分かりやすい平易な言葉で表現されています。

#### 【参考: 子ども向け「子どもの権利 12 か条」】

- 1. わたしは自分のしたいことをする
- 2. わたしは病気の時に誰かに助けてもらう権利がある
- 3. わたしには守られる権利がある
- 4. 誰もわたしをなぐることを許されない
- 5. 自分ののぞむことを学ぶ権利がある
- 6. 何か決めるときに参加する権利がある
- 7. のぞめば一人でいることができる
- 8. 言いたいことはなんでも言える
- 9. 誰もわたしの物をうばうことはできない
- 10. 遊んだり、リラックスしたりする権利がある
- 11. わたしには誰かに世界を説明してもらう権利がある
- 12. わたしは、何が許され、何が許されないかを知る権利がある













### 視察概要

### 1 ホーエンブーヘン保育所・幼稚園 AWO Kita Hohenbuchen

運営団体 ドイツ労働福祉団体ハンブルク支部 AWO Landesverband Hamburg e.V.

ご担当者 ステフェン・スタッペルフェルト氏

Herr Steffen Stapelfeldt

URL https://www.kita-hohenbuchen.de/ 視察日時 2024年6月24日(月)09:00~11:00

最初に訪問したホーエンブーヘン保育所・幼稚園は、ハンブルクの中心から北に20kmほどの場所にあります。園の入り口へは橋を渡っていきます。橋の下はホーエンブーヘンタイヒという湿地で、その水は、近



くを流れるアルスター川につながっています。アルスター川と園の間には、ホーエンブーヘンパークの樹林 が広がっています。



この園には1~6歳までの子どもたち約130名が 通っています。1~3歳の保育部門のグループと、3 ~6歳の幼稚園のグループがあります。各グループ には、異なる年齢の子どもたちを混ぜて遊ばせてい ます。これは、年長の子どもは年少の子どもの質問 に答えたり、面倒を見たりすることで自信が得られ、 年少の子どもも年長の子どもをモデルに様々なこ とを学べるからとのことです。このほか、インクルー シブ(またはインテグレーション)のグループもあり ます。

ドイツ語で「高いブナの木」という意味の名前をもつこの園では、自然とのふれあいを一番大切なことと

考えています。この園は、1974年に、農家だった 土地を譲り受け、建物を改築して創設されました。 牧歌的な風景のなかにある1haほどの敷地には、 外庭、中庭、高いブナの木があるところの3つのエ リアがあります。園児が自然と親しむことを目的に つくられた広々とした園庭には、草原、中低木によ る茂みなどが設けられ、園児が自然とふれあうため の要素が散りばめられています。また、ヤナギの木



によるティピなどくつろぐ場所も設けられています。



園の周辺には自然保護区の森や菜園が広がり、この園では園庭にとどまらず、これらの環境も上手に利用しています。園周辺の森や菜園では、枯木を生きもののために敢えて残したり、虫の生息を促す「虫宿」を設置したりと、生きもののための様々な工夫が見られました。

この園では園児の主体性を積極的に伸ばしており、例えば、植える植物は園児が話し合いで決めるなど園児が園の様々な環境づくりに参画すること

を促していました。こうした取り組みは、この園の運営団体である AWO ハンブルグがまとめた「子どもの権

利12か条(例えば、6番目、何か決めるときに参加する権利がある)にもとづいています。



壁に貼られていた子どもたちの絵には、どれもたくさんの木や草、昆虫などの生きものが、大きく生き生きと描かれていました。

### 2 ジョニ・ビルクホルツ保育所・幼稚園 Kita Jonni Birckholtz

運営団体 ドイツ労働福祉団体ハンブルク支部 AWO Landesverband Hamburg e.V.

ご担当者 園長 アン・チャンタル・デレダ氏とネレ・レムケ氏

Frau Ann Chantal Deledda, Frau Nele Lemke

URL http://www.kita-jonni-birckholtz.de/ 視察日時 2024年6月24日(月) 13:00~14:50

この園には、0~10歳までの子どもたち約 125 人が通っています。4時間または10時間という設定のほかに、朝6時からの早朝サービスもあります。敷地内には、2つの園舎が向かい合うように建っています。





自然の要素をたくさん取り入れた園庭は、まるで 大都会のオアシスです。園庭の広さは1ha 以上も あり、広々とした草地に中低木によるまとまった茂 みが点在していました。この茂みは、園児が一人で いたいときの格好の遊び場になっているとのこと です。また、この茂みでは、木登りも盛んで、園児は 自分で登れる木を探し、果敢にチャレンジしていま した。保育者は、園児が木から降りられなくなった ときだけ手を差し伸べるとのことでした。草地の中 央には築山が設けられ、起伏に富んだ環境が形成

されていました。園庭には、短く切られた丸太がいくつも転がされており、これは、生きものの隠れ家となるとともに、園児の大切な遊具となっています。

また、この園の敷地の一部は湖に面して おり、園児は天気の良い日に連れだって出 かけ、先生と一緒の時に水辺で遊びます。 園児は、また、水辺にやってくるカイツブリ やサギなどの水鳥、魚や貝などの生きもの の観察なども楽しんでいます。

園では、保護者にこの自然ゆたかな園庭 の大切さについて理解してもらうために、 様々な工夫をしていました。まず、入園時 に1時間かけて園児と保護者が園庭で遊ぶ



機会を設けます。その後も、3か月かけて保護者に 園庭での園児が遊び方を見てもらい、園児にとって の園庭の大切さを理解してもらっています。なお、 保育者は、広い園庭の要所に立ち、安全管理を行っ ているとのことです。

この園では、園児の五感をとぎすます工夫も積極的に行っています。例えば「裸足の散歩道」です。仕切ったいくつかの枡に小石や松ぼっくりを敷き詰め、ぬかるみも設けて、園児が裸足で歩き、様々な



感触を味わいます。これは、保護者と一緒に製作したとのことです。

園庭の維持管理にも、環境に多様性を設けて、生きものが暮らしやすいよう、園児の遊びが広がるよう、 様々な工夫が見られました。例えば、草地では短く刈られているところと粗放的なところを設けて変化をつ



けていました。こうした管理は、運営 団体の AWO から維持管理の担当職 員が定期的に派遣され、園と相談しな がら実施されるとのことです。





園庭には、広々した草地や太い枯死木などもありました。生えている木は、安全に気を付けながら 自由に登ってよいそうです。

園の隣にある保護区の湖にも行ってみました。 夏の日には、先生に連れ立って園児も遊びに来 るとのことでした。

## 3 バリーン自然保育所・幼稚園ブラムフェルト Ballin Naturkita Bramfeld

運営団体 バリーン財団 Ballin Stiftung e.V. ご担当者 園長 ジェフ・ヘルム氏 Herr Jeff Helm

URL https://www.ballin.hamburg/angebote/ballin-naturkita-bramfeld/

視察日時 2024年6月25日(火) 08:30~10:30

バリーン自然保育所・幼稚園は、バリーン財団が運営する園のひとつです。90年の歴史をもつこの財団がかかえる園は、現在ハンブルクに19か所あります。人格形成やからだの成長にとって幼児期の自然とのふれあいは大きな価値があるとして、財団が運営する園では、園庭ビオトープや森での五感を使った直接的な自然体験を重んじています。



この園には、0~6 歳の子どもたち約140人が通っています。3 歳までの保育のグループが2つ、2~6

歳の森のグループと、3~6 歳までの園 庭で過ごすグループがあります。

園が大切にしていることは、「自然とのふれあい」と「子どもの参加」です。毎日自然ゆたかな環境のなかで、五感を使って、障害の有無や年齢の違いを超えて一緒に遊ばせたり、プロジェクト活動に参加させたりすることで、園児の心とからだの発達を促しています。

一緒に過ごすことで、園児はお互いの異なる点や 能力を認め、相互理解や思いやりの心が芽生え、協調 性が育まれています。したがって、この園では、州が 取り決めた保育・幼児教育の内容は、園庭などの自然 を題材に、総合的に取り組んでいるとのことでした。 保育者は日々の活動が州の取り決めのどの部分に該当するかを確認しながら、援助をしています。また、自然との共生や持続可能な社会の形成に向けた環境教育にも力を入れており、園児が普段の生活の中で、これらを意識しながら、自分のできることを成すよう促しているとのことです。





高木や低木が多く生えている園庭には、広いところ、狭く囲まれたところなど、様々な空間があり、園児の遊び心を掻き立てます。 昆虫などの生きもののために枯れ枝を積み上げたコーナーもありました。また、園舎と園庭の間には、野草が生えているエリアをつなげるように地域在来の草を植えて、花壇の代わりに帯状の野草園を

つくっていました。特に境目を設けないことで、自然に囲まれた美しい園舎という景観がかたちづくられていました。

この園では、園の姿勢に共感する保護者が我が子を入園させているため、改めて保護者に園児の自然とのふれあいの大切さを説明・説得することはしていないとのことです。また、今でも、多くの家庭が我が子を入園させるチャンスを待っているとのことでした。



園庭での活発な遊びを推奨する一方、園舎の中には、 子どもが一人静かに過ごせる場所も設けています。

## 4 環境センター「グート・カールスヘー工」 Umweltzentrum "Gut Karlshöhe"

運営団体 ハンブルク気候保護財団 Hamburger Klimaschutzstiftung ご担当者 生物の専門家 シルヴィア・シューベルト氏 Frau Silvia Schubert

URL https://gut-karlshoehe.de/

視察日時 2024年6月25日(火) 10:45~12:45



グート・カールスへー工環境センターは、ハンブルクの中心から北東に約12kmの位置にある緑のオアシスのような場所です。国境や時代を超えて、共有すべき大切な自然資源を将来世代に手渡すための暮らしについて、自然体験を通じて子どもから大人まで一緒に楽しく学ぶために、2008年に設置されました。センターの管理運営は、同年に設立されたハンブルク気候保護財団という非営利組織が受け持っています。財団は、『ドイツ環境自然保護連盟』(BUND)ハンブルク支部や『ハンブル

ク・ブランフェルド地区養蜂家協会』などのNGOと連携して、イベント運営などを行っています。

ハンブルク郊外にある9haの敷地内には、自然ゆたかな草原、原生林と呼べるような森、水辺などが広がっています。『発見の道』の木道や湿地のデッキからは、自然をまじかに観察することができます。ハチ類の 巣の構造やミツバチの行動について学ぶ学習用養蜂箱、とわらと泥で作られた昔の養蜂箱もあります。牧

草地にはヒツジが10頭以上飼育されていて、ヒツジとのふれあいが楽しめます。5月の毛刈りのデモンストレーションには、多くの人が訪れてお祭り騒ぎになります。散在果樹園では、自然草地と果樹が織りなす美しい景色に出会えます。

センターの建物は、昔の領主の館だったそうです。センターの職員は12名。事務局長のほか、環境教育や生物、気候変動などを専門とするスタッフが働いています。できるだけ多くの人に、自然や環境教育の機会を提供するため、センターは日の出から日没まで一般市民に無料で開放しています。





また、保育所・幼稚園、学校などにとっての貴重な自然学習の場にもなっていて、多くの園や学校のグループが日常的に利用しています。年間約150の保育所・幼稚園、約400校の小中学校が利用しているとのことです。園の子どもたちは、センターが用意した教育プログラムなどを通じて、スタッフから自然や野生の生きものなどについて、体験しながら楽しく学んでいます。

見学時にいくつかの教育プログラムを試してみまし

た。森の中で樹冠部で起きていることに関心をもたせるよう上に向けた鏡を見ながら歩くプログラムでは、 いつもと全く違った景色が体験できました。また、太陽光の熱量を体感する実験では、太陽光線の強さを実 感しました。

今回ご案内いただいたシューベルト氏によると、「近年、昆虫が減少していると実感する。子どもの健全な発達のためにも、環境学習をすすめるためにも、子どもたちの身近に直接体験できる自然があることが大切」とのことでした。



水辺の近くに設置された「カエルの生息地」えさやり や捕獲を禁止する説明版と、散在果樹園内にある野 生に近いリンゴやナシの果樹に関する説明版。



## 5 ハーブルク森の保育所・幼稚園 Wald-Kita Harburg

運営団体 ドイツ労働福祉団体ハンブルク支部 AWO Landesverband Hamburg e.V.

ご担当者 園長 コリナ・ラデケ氏 Frau Corinna Radeke

URL https://www.kita-wald-harburg.de/ 視察日時 2024年6月26日(水) 08:15~10:00

森の幼稚園は、自分の子どもを自然のなかで遊ばせたいという 一人の母親の願いと努力が実を結び、1950年代にデンマークで 生まれました。ドイツでは、1990年代初頭にフレンスブルクに初の 公認の森の幼稚園が設立され、その後全国に広まり、現在、様々な 形態のものを含めて2,000か所近くあるとされています。





この園は、ハンブルクの中心から南に約1 0kmの森の中にある創設20年の森の保育所・幼稚園です。3~6歳のグループが2つ、1グループに20~22名の子どもたちがいます。ほかに2~3歳の保育のグループが1 つあります。

この園は、森の園としては珍しく、しっかり した園舎の建物と砂場などがあります。敷地 は、ハンブルク市の土地を借りています。屋 上緑化がとても素敵な園舎は、AWOが20 年前に建てました。園舎内は、コンパクトで使

い勝手がよさそうでした。子ども用の暖炉付きミーティングルームもあり、真冬の極寒の日には暖炉に火をともして楽しみます。ほかに身体に障害をもつ子やコミュニケーションをとるのが苦手な子などがセラピーを受けるセラピールームもあります。

園児が毎日を過ごす森はハンブルクが所有管理する自然 保護地域で、無料で使用させてもらっています。園のそば に営林署があり、営林署のスタッフは、森の管理だけでなく 時々園児と一緒に森に行き、木の名前や特徴などを教えて くれるそうです。また、木の枝を組んで遊具を作ってくれた り、悪天候の後など森が危険な状態にある時に連絡をして くれたりします。



朝8時 30 分、園児が登園してきます。登園 後、森に出向く前に、園庭で輪になり、丸太に座 り、まずは「今日は森のどこに行く?」「森で何を したい?」といったミーティングを行います。

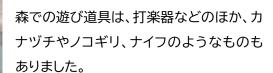
その後、森の中へ。園児は、われ先にと保育者を置いて駆け出します。園児は、急な斜面をかけあがり、枝を手にし、ナメクジやフンコロガシなど生きものを見つけては立ち止まります。園児は、表現やコミュニケーション能力、合意形成



の力など自然遊びを介して総合的に培われて います。

森の中ではいくつかのルールを設けています。例えば、『森に入るときは先生より先に行ってもよいが、印をつけた木のところでみんなを待つ』、『木登りは年長の子どもだけで、ブナなどの丈夫な木を選ぶ』、『沼に行ってはいけない』など。保育者は、時に、園児が森での遊びが広

がるように、ナイフやお絵かきの道具などを用意します。ナイフは、使い方や、生えている木を傷つけないなどのルールを教えたうえで使用を許可しているとのことです。



### 6 ブランケネーザー・ヴァルドルフ幼稚園

### Blankeneser Waldorfkindergarten

運営団体 ハンブルク・ヴァルドルフ幼稚園連盟

Hamburgische Vereinigung der Waldorfkindergärten e.V.

ご担当者 園長 アストリッド・パウルスーシャルフ氏 Frau Corinna Radeke

URL https://waldorfkindergaerten-hamburg.de/blankenese.html

視察日時 2024年6月26日(水) 10:45~12:30

シュタイナー教育(Waldorfpädagogik)は、20世紀はじめのオーストリアの哲学者・神秘思想家ルドルフ・シュタイナーが提唱した『教育芸術』(Erziehungskunst)としての思想およびその実践で、神智学などに基づいています。ドイツではヴァルドルフ教育と呼ばれ



ているこの教育法は、日本に紹介された際に、ルドルフ・シュタイナーの名前をとって、『シュタイナー教育』と

呼ばれるようになり、現在、日本国内ではこちら の呼称が一般的となっています。

この園には、3歳以下のこどもたちのグループ 1つと、4~6歳の子どもたちのグループが2つの 合計3つのグループがあります。年齢を混合する ことによって、他者に対する寛容さが身につき、 模倣や経験から様々なことを学ぶことができ、さ らなる発達につながっているということです。

園長先生曰く、「家庭において子どもが自然とふれあう機会が減ってきている中で、園において園児が自然とふれあう機会を積極的につくる必要ができてた」とのこと。こうしたことから、この園では、毎朝、どんな天候でも必ず外で遊びます。



「自然、そして私たちの生活には、一週間、一年間といったスパンの中でリズムがあり、これらは体験を通じて気づくため、身近に自然が必要だ」と園長先生は言います。園児は、このリズムの中で、与えられる遊びではなく、その時だからできる遊びを自ら気づくことが大切であり、そうした能力の醸成をこの園では重要視しているとのことでした。

園庭は、木製の大型遊具が置かれ、園庭の周囲は草が生やされ、中低木が植えられて、緑のトンネルとなっていました。緑のトンネルは、凸凹とかたく踏み固められた土から、園児が頻繁にここで遊んでいる様子が伺えました。また、園庭に隣接する小規模な森も積極的に活用しているとのことでした。



園に隣接しているハンブルク市が所有する森。 この森の中で遊ぶことも市より許可されています。



遊び道具も、プラスチックなどの人工的な素材のものは排除して、布や毛糸、木などの自然のものが中心です。

### 7 ゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園 Kita Sonnenhügel

運営団体 ドイツ労働福祉団体ハンブルク支部 AWO Landesverband Hamburg e.V.

ご担当者 園長 ジルケ・シュローダー氏 Frau Silke Schröder URL https://www.awo-kita-sonnenhuegel.de/

視察日時 2024年6月27日(木) 08:30~10:15

『太陽の丘』の意味を持つゾーネンヒューゲル保育所・幼稚園は、ハンブルクの中心から北東に約13kmの位置にあります。近くに、市が所有する『ベルネルの森』があるなど、自然ゆたかな環境に恵まれています。この園には、約50人の園児が通って



おり、10人の保育者で対応しています。1968年の設立から半世紀、この園はたくさんの園児を見守り、育んできました。40年間勤務している保育者や、子どもの頃ここに通っていた保育者もいるなど、地域のコミ

ュニティと深い絆で結ばれています。



園庭には、シラカバなどの木立やハチ類が好むような野草の草むら、昆虫のビオトープにもなる腐葉土を作るための『落ち葉だめ』もありました。設立当初狭かった園庭は徐々に拡大し、小山など遊びの要素を増やしているそうです。 保育者の中には元大工がおり、虫宿や巣箱などを手作りし設置しているとのことでした。

園では、週に1度森に出かけるグループがあります。2歳、3~4歳、5~6歳のグループに分

かれ、複数の保育者と近隣の森に出かけます。ブナ、トネリコ、カシ、モミジなどの大木が生えている森には、シカなどの哺乳類や野鳥、昆虫もたくさんいます。森の中には、花や葉、木の実や小枝、倒木など、既製のお







園では、自然とのふれあいは、様々な能力 の発達にとどまらず、幼児期における環境学 習の一環としても位置付け、この発達期なら ではの環境保全活動を考え実行を促すといっ たことねらいに位置づけているとのことでし た。 もちゃにはない、自由な発想で遊べるものがたくさんあります。

視察当日も、その園児らがついてきて、『見える範囲で遊ぶこと』、『犬が寄って来てもなでずに、木の棒を地面に置く』『毒のあるキノコは触らない』、『口に物を入れない』など、森の入口で森での遊びのルールを復唱してから、森に入っていっていました。





近隣の森も視察しました。



森に落ちていた木で作ったオブジェ

## 8 ハンブルク自然保護アカデミー「ボーベルガー・デューンハウス」 Boberger Dünenhaus, Naturschutz-Akademie Hamburg

運営団体 ロキ・シュミット財団 Loki Schmidt Stiftung

ご担当者 ボーベルガー・デューンハウス所長 カレン・エルバース氏 Frau Karen Elvers

URL https://loki-schmidt-stiftung.de/boberg

視察日時 2024年6月27日(木) 11:00~13:00

ハンブルク自然保護アカデミーは、子どもや教育者向けの 自然環境教育や、自然景観ガイドのトレーニングの機会を提供 するための施設です。

これを運営するロキ・シュミット財団は、正式名称を「ハンブルク自然保護・絶滅危惧植物保護財団 (Stiftung Naturschutz Hamburg und Stiftung zum Schutze gefährdeter Pflanzen)と言い、ドイツのシュミット元首

相の妻で、生前絶滅危惧種の保護に尽力した自然保護主義者の口キ・シュミット氏が設立したことから、略してロキ・シュミット財団と呼ばれています。ロキ・シュミット財団は、特に絶滅の危機に瀕した生物種やビオトープの保護保全に重点を置いており、それらの種や生態系の存続にとって重要な「生存のための島」となる場所を開発から守るために、土地を買い取って保護区とすることで実践してきました。







財団の自然環境教育の拠点となっているのが、今回訪問するボーベルガー・ニーダールング自然保護区にある自然保護情報センター「ボーベルガー・デューンハウス(「砂丘の家」の意)」です。ここには、氷河が起因してできた内陸砂丘が広がり、砂丘ならでは

のジバチやクモなどの動植物が見られます。工業用の砂採掘が進み、約30m堆積していた砂が8mにまで減り、このままだと砂丘が消滅に至ると危機感が高まり保全されることになりました。

ツアー訪問時は、内陸砂丘を実際に歩いて、見つけた生きものを観察し、その後室内で施設について、また展示などの説明を受けました。施設の入口に設置された、様々な「虫宿」にたくさんの虫が訪れ



ていたのが印象的でした。



この施設では、内陸砂丘の生態系保全の他に、春は野鳥、 夏は水辺の生きもの、秋はリスやヤマアラシ、冬は動物のフィ ールドサインなどを題材とした環境学習にも力を入れている とのことです。3~6歳を対象に、将来の自然の研究者になっ てもらえるよう直接的な体験を通じて興味関心を喚起してい ます。また、6歳からは一人の研究者として個人利用を積極 的に受け入れ、10歳からはここの自然の価値を発信するミッ

ションを課し、成人になったときには自然の ために何をすればいいのかが分かる人となる よう、様々な試みを行っているとのことでし た。ハンブルク自然保護アカデミーのボーベ ルガー・デューンハウスは年間 12,000 人が 利用しており、近隣の園も環境学習のために 頻繁に訪れているそうです。





施設の周辺には内陸砂丘の景観が広がっています。



(公財)日本生態系協会は、自然と文化が共存する美しいくにづくり・まちづくりを目指して活動するシンクタンクです。私たちの生存基盤である自然生態系を守るために、経済や社会のあり方について国内や海外の情報を広く集め、国際的な視点からさまざまな提案を行っています。そうした活動の一環として、自然を生かした保育・幼児教育の支援にも力を入れています。研修会の講師派遣、園庭ビオトープ※づくりの伴走支援、個別の海外視察ツアーの企画など、みなさまのご要望にお応えできるよう引き続き努力してまいります。是非お気軽にご相談ください。

※園庭ビオトープ: ビオトープは「自然の生きものがくらす空間」という意で、地域の地形や気候に応じて森や林、池や草地など様々なビオトープタイプがあります。園庭ビオトープは、これら地域のビオトープをお手本に、教育や保育のために学校・園の敷地や近隣に設ける<u>地域の自然</u>です。ここで子どもたちは、日常的に自然とふれあい、自然との共生について考えます。